2020年度学位記・修了証書授与式 理事長祝辞

学校法人東京理科大学を代表しまして、一言お祝いを述べさせていただきます。

本日、皆さんが多くの祝福のなかで、伝統と歴史ある東京理科大学の学位記・修了証書を手に巣立たれることを、心からお祝い申しあげます。

また、配信映像をご覧のご父母の皆様におかれましては、お子様が、無事、進級・卒業の厳格な“実力主義”の東京理科大学を、卒業・修了されたこと、さぞお喜びのこととお祝い申しあげます。

本日、卒業・修了を迎える皆さんが、この日を迎えることができたのは、今日まで見守ってこられた、ご両親、ご家族、そして学業を支えてこられた先生方や友人、その他、多くの関係者の方々のおかげであり、“感謝の気持ち”を忘れないでください。

皆さんの門出にあたり、理科大の卒業生としてどのように生きてもらいたいか、本学の理事長として、また、数十年前に本学を卒業した先輩として、二つのことをお伝えしたいと思います。

まず、一点目は、～ノブレス・オブリージュの精神こそ、理科大生が受け継ぐべき建学者のDNAである～ということです。

皆さんもご存じかと思いますが、東京理科大学は平均年齢25歳の若き理学士たちによって創設されました。

「理学は近代化を促進し、世の中を豊かにするために不可欠なものだ。しかし、政治学や法律学の進歩や普及は活発だが、理学の普及は進んでいない。この憂うべき状況を打開するため、まずは我々自身で、理学を学びたいという人々に本格的な理学を伝授し広めよう」。

若者たちの熱い思いにより、今から140年前に神田小川町の小学校の校舎を間借りして開設された東京物理学講習所が本学の始まりです。

“エリートとは、自分が他人よりも優れていると思い込んでいる気取り屋ではなく、自分自身に多くを要求し、困難と義務を背負い込む人である“と、スペイ

ンの哲学者オルテガは言いました。

建学者たちは、〝理学を普及することは大切だが、極めて難しい。だからこそ、率先して成し遂げよう〟と、ノブレス・オブリージュの精神を実践し、今日に続く理科大の基礎を作り上げました。

自己の利益や名誉のためでなく、社会の役に立つことをするという信念のもと、苦難を乗り越え成し遂げた建学者たちの精神を忘れてはいけません。これが理科大の DNA であり、皆さんに引き継いでいただきたい理科大スピリットです。

二点目は、〜理科大で培った科学的思考力をもって、社会に大きく貢献し、活躍して欲しい〜ということです。

理科大は、建学当初、“入学は易しいが、進級は厳しく、卒業できる者は極めて少ない学校”として知られていました。それは、本学の存在意義が、“高度な専門知識と科学的思考力をそなえた、社会に貢献できる人材を育てること”と考えられてきたからです。ここで言わんとする“科学的思考力を備えた人”とは、“真実に向き合い、真実に基づき判断し、思考し、真実を究める力を持っている人”、“次々に押し寄せる問題に対し真剣に取り組み、自分の頭で考え、ものごとの本質や原理を理解する力を持った人”です。

科学的思考力を身に付けるには、単にものごとの表面だけを理解するのではなく、混沌とした事象から本質を見極め、また、問題の背後に潜む真実をトコトン究めようという学びが必要です。これは、現在のコロナ下はもとより、SDGs に代表される世界規模の課題解決を求められる時代には、より重要となる素養です。

私は 1972 年に理工学部経営工学科を卒業し、ある食品会社に就職しました。入社後は様々な部門に配属され、専門外の部署に配属されたこともありました。しかし、どの部門でも、やるべきことは、問題の原因を科学的思考を駆使して突き止め、解決策について同僚達と議論を戦わせていくことでした。

幸い、私は、ともに課題解決に取り組む優秀なメンバーに恵まれ、会社員生活を大過なく過ごすことが出来ましたが、社会に出ると、理想的な条件や環境が最初から与えられることなど、滅多にありません。「こんな環境では、いい仕事な

んかできない」と努力を怠っていては、社会の中で自分を成長させることは難しいでしょう。

与えられた環境の中で自分に何ができるのかを考え、その中でベストを尽くす。その結果、自分への評価や、信頼等の状況が少しずつ改善していく、この積み重ねが、やり甲斐のある仕事を実現させていくための王道です。

幸田露伴が「うまくいかない人に共通するのは、その原因を運のなさや他人のせいにすることだ」と述べていますが、チャンスは、チャンスがやってくる環境を普段から整えている人のところに舞い込むのです。

皆さんのこれからの大いなる成功・活躍を期待しております。

本日は、誠におめでとうございます。

2021 年 3 月 18 日

学校法人 東京理科大学

理事長 本山 和夫